外交官としてかつやくした人　珍田捨巳（ちんだすてみ）

明治時代、外交官としてかつやくし、大きな功績をのこした人が、私たちの郷土弘前から出ている。珍田捨巳である。

珍田が、外務省に入ったのは、一八八五年（明治十八）。その後、各地で領事をつとめ、さらにオランダやロシアなどの公使をへて、アメリカ・イギリスなどの大使もつとめた。

津軽にうまれた珍田は、ふだんは＜ずう、ずう＞弁で、日本語は下手なほうだったが、英語にかけては、外務省でも右にでるものはなかったといわれる。

外交官としての珍田で忘れられないのは、①日英同盟や、②日米紳士協定に参加し、③日露戦争後の講和条約をむすぶために、大きなはたらきをしたことである。

のちに、東宮殿下（昭和天皇）が、外遊をしたとき供奉長（おつき人の責任者）をつとめ、東宮大夫、皇后宮大夫をへて侍従長となった人である。

（註）①　**日英同盟**　一九〇二年（明治三十五）、日本と英国のあいだでとりかわした条約である。

すなわち、極東の平和を維持しながら、清（いまの中国）や韓国の領土を保護し、日英両国の利えきやけんりを守ることをのべている。

② **日米紳士協定**　日本人が、アメリカに移住することから、さまざまな問題がおこり、一九〇七年（明治四十）移民問題について、日米間でとりきめたやくそくごとである。

一九〇〇年頃から、アメリカに移住する日本人が多くなったが、とくに一九〇六年（明治三十九）におきた大地震の復旧のため、日本からアメリカに数多くの労働者がわたった。

また、この頃からハワイや、アメリカ西海岸で農業に従事する日本人もふえてきた。

日本人は、きんべんでしかも、安い賃金ではたらいた。そのため、日本人の排斥運動がおこるに到ったが、日本では事を荒立ててはは得策でないと考え、とくべつな場合をのぞいては、一般の移民を抑制することをやくそくした。

③ **日露戦争**　一九〇四～一九〇五年（明治三十七～三十八）にかけて、日本とロシアが、満州（いまの中国東北部）と日本海で戦った。

ことのおこりは、とうじの帝政ロシアがアジアに侵略をはじめ、日本もまた大陸に進出していたために、しょうとつした戦争である。

たたかいは、日本の勝利におわったが、両国とも国力をかけた戦争だった。日本は、このたたかいで、やく十二万人が戦死し、とうじの金で十七億円をついやしている。

④ **ポーツマス条約**　日露戦争の講和条約である。一九〇五年（明治三十八）、アメリカ大統領ルーズヴェルトの調停で、ポーツマスに於て条約をむすんだ。

これによって日本は、韓国にたいする優先権や、関東州（いまの中国領。大連や旅順をふくむ）の租借、南満州鉄道と樺太（いまのサハリン）の南半分をゆずりうけることになり、また沿海州での漁業権も得た。

珍田捨巳は、一八五六年（安政三）津軽藩士である珍田有孚という人の長男として生まれた。子どものころの名まえは辰太郎（しんたろう）という。

祖父（裕之亟という）は、とうじ藩学校である稽古館で漢学を教える先生だった。

子どものころの辰太郎は、とくに祖父にかわいがられて育った。裕之亟は、孫の将来に大きなきたいをよせ、みっちりと漢学をしこんだ。

家に客がくると、裕之亟は辰太郎をそばによび、客のまえで、教えたことを暗誦させるのがくせだった。自分の孫が、よくべんきょうが出来るのを、じまんしたかったからである。

珍田はのちに、工藤儀郎という人が開いている学習塾にかよってべんきょうをし、さらに藩の儒者（中国の孔子の教えにもとづいて、政治や道徳を教える人）である櫛引錯齋（くしびきさくさい）先生について修業をつんだ。

錯斉は、よっぽどすぐれた先生であったらしく、珍田はつぎのようにのべている。

＜先生は儒者としての、識見の高いのはもちろんだが、権力にこびることはせず、名誉や金銭にもてんたんとした高潔なおかただった。何ごとにも、真心をもってあたり、近世まれにみる偉い人だった＞と。

教え子は、先生に似る――といわれるが、こうした高潔な徳のある先生のおしえをうけた珍田も、温厚でまごころをこめてことにあたる人柄だった。

稽古館では、とくに英語教育に力をそそぎ、それが後に東奥義塾となる。

珍田は、東奥義塾に入ってべんきょうをした。なかでもジョン・イング先生が赴任して英語の指導にあたったが、珍田の語学力をたかめ、外交官として身をたてる上での大きな基礎となっている。

一八七六年（明治九）、明治天皇が青森にお出でになられたとき、イング先生は珍田たち英語のすぐれているもの十人をつれて、御前講演（英語ではなしをする）に出かけた。

珍田が講演したのは、カルタゴの英雄ハンニバルが、アルプス山をこえてローマに攻め入ったときの、有名な「士卒をはげますことば」であった。

そのあとで、イング先生は、義塾から五人の学生をえらび、母校であるアメリカ・インデアナ州にあるアスベリー大学に留学させているが、その中に珍田も入っていた。

留学をおえて、珍田がもどってきたのは一八八一年（明治十四）――彼はただちに、東奥義塾の先生にむかえられて英語を指導した。

義塾で、教壇に立ったのはわずか四年だった。外務省に入ることになったからだが、彼のすばらしい語学力が認められたからである。

外交官としての珍田は、どのような人だったのか。彼と交わった人たちの話を二～三ひろってみよう。

もと首相、幣原喜重郎（しでハらきじゅうろう）は〈珍田は、意志がきわめてかたく、話すことも理路整然として、けっして乱れることはなかった。そのころ、雄弁家として世界的にも名高かった、アメリカ国務長官ブライアンも珍田と話をするときは、論理的に屈することがしばしばだった。しかし、珍田のことばのつかい方は、相手の気持ちを傷つけることなく、きわめて婉曲だった。それには、当時のアメリカ大統領ウイルソンも感動していた〉とのべている。

また、満鉄総裁や外務大臣をした松岡洋右（まつおかようすけ）は、珍田が外務次官のとき、わたしは政務局の若い書記官だった。年齢的にもちがっていたので、深い交渉はなかったが、よく宴会などではいっしょになった。その時のかんじでは、人のいい立派な紳士だったが、職務のうえでは、すこしのんきすぎる印象をもっていた。

それがあとになって、まったく思いちがいだったことがわかった。すなわち、アメリカ大使としての珍田のもとでつかえることになったとき、彼は実に職務にくわしく、しかも勤勉で、非常にこまかな点にまでよく気がつくことを知ったからである。

この人は、見たかんじは田舎の好々爺（や）だが、ただの人物ではない。頭はきれるし、知しきは豊富で、しかもどんな激務にもへこたれない、ねばりづよさがある。それをしらないものには、無能に見えるかもしれないが大まちがいだ、と評している。

また文相や農相、外相をつとめた牧野伸顕（まきのしんけん）や、海軍大臣や首相をつとめた山本権兵衛（ごんのひょうえ）も、珍田をとても信頼していた。

珍田が、外務大臣のときだった。とうじの桂首相が、珍田を官邸によんだ。そこに居合わせたのは山本だった。二人は、或る重大事件の対策を珍田に命じたのである。（この事件というのは、日露講和条約に関係があるらしいが、具体的な内容ははっきりしない）

いつもであれば、婉曲ないい方をする珍田だが、このときは違っていた。

「それは、実行不可能であります。」と、はっきり断ったという。

だが首相も山本も、あきらめなかった。その後も何度か珍田に実行をせまったが、ついに彼は、初めの意見をひるがえさなかった。あとになって、その命令がほんとうに不可能だったことが分かったが、首相も山本も、＜珍田の毅然とした態度に、心をうたれた＞といっている。

さて、昭和天皇が、ヨーロッパに外遊なされたとき、珍田は供奉長（ぐぶちょう）としていっしょに出かけたが、そのときの話である。

一九二一年（大正十）――皇太子だった天皇にとっては、はじめてイギリス、フランス、ベルギー、オランダ、イタリアなどの国々をおたずねになられるのである。そして自由に、青春をたのしまれるまたとない機会でもあった。

それまでは、宮中にいて切りぬきだけでしか見られなかった日本の新聞を、はじめてロンドンですみずみまで、ごらんになったといわれる。

またパリでは、御自分で乗車券をもとめられて地下鉄にもお乗りになったが、それがよっぽどうれしかったに違いない。そのときのことを、御弟の秩父宮に「英国で、はじめて、人間としての自由を知った。」と、お手紙をだされているが、それができたのも、みな供奉長だった珍田の心づかいからだった。

今でこそ、天皇や皇族がたの外国御訪問の時には、まえもって行く先の国と十分れんらくがなされ、日程もくまれるのに、その頃はきわめて漠然としたものだった。横浜を出発したものの、はっきり訪問がわかっているのは英国だけで、そのほかは宮内省でもまだきまっていないありさまだった。思いあまった珍田は、さっそく政府に問いあわせの電報をうった。それに対して＜いまは、ヨーロッパの社会情勢は安定していないから、イギリスとフランスだけをまわるように＞という返事だった。

こうして皇太子御一行はイギリスに到着したが、おまちしていたのは林権助という駐英大使だった。そのとき珍田は、林大使からベルギーとイタリアの王室でも、ぜひ日本の皇太子をおむかえしたいことをきいた。＜わかった。せっかくのお招きであり、皇太子の御見聞をひろ

める意味からも、それは私の責任で、なんとか叶えてあげたい＞と心に決めた。

珍田はさっそく皇太子の補導役としてついてこられた閑院宮におはからいして、訪問国をイギリス、フランスのほかベルギー、イタリア、オランダを加えることにしたといわれる。

皇太子も、珍田を心から御頼りになられ＜皇太子殿下は、おそれ多くもほとんど慈父に対するような態度で珍田に接せられ、私どもはそばで拝見いたしておりまして、ただ感激した次第です＞と、そのときの供奉員だった山本信治郎が語っている。

天皇御自身も＜このときの旅行は、それまでの生活では経験もしない、はじめてのことだったので、なにかと苦労はしました。が、閑院宮をはじめ、珍田やほかの随員が親切に指導してくれるので、無事帰ることができました＞とのべておられる。

一九二七年（昭和二）、皇太子が新しく天皇になられたとき、珍田は、とうじの宮内大臣だった一木喜徳郎から侍従長をたのまれた。しかし珍田は、老齢でしかも健康がすぐれなかったのでこれをことわった。

だが一木の「体を以てするご奉公は、侍従次長が代わってもできることもあるだろう。しかし、心を以て御奉公するのは、珍田のほかにはない。なんとか、引きうけてくれないか」という重ねてのねがいに、珍田もこれを了承したのである。

ひとたび了承した以上、珍田は老齢をいとわず、真心をもって天皇におつかえしたのはいうまでもない。

天皇も、珍田のきもちをお察しになられ、各地に行幸されるときは「珍田は年をとっているから、お供しなくてもいい。」といわれた。しかし珍田は、老体にむちうって海軍大演習や、小笠原、あまみ大島などの行幸にまでおともをしている。

この一徹な老臣も、宴会のとき酒にようと、歌をうたうのがきまりだった。が、その歌は、聞くにたえないほどの音痴だった。そして、ロずさむ歌も、いつもきまっていた。歌詞は＜船は○○○○○でも、炭薪は積まぬ。積んだ荷物は米と酒＞であった。

珍田は、清廉潔白な人だった。

一九二八年（昭和三）――天皇即位の大礼が京都でおこなわれた。さまざまな儀式がおわるまで約二十日間。珍田はそのあいだ、寒い旅館に泊まりこみ、一つの儀式も欠かさずに出席して、ぶじ侍従長としての責任をはたしたのである。

しかし、それが老齢の珍田にはこたえたのか、大礼がおわった一九二九年の正月、病にかかって亡くなった。だが珍田には、ぶじ大任をはたした満足感があったにちがいない。七十四歳だった。

鎌倉市に、珍田昌哉という捨巳の孫にあたる人がすんでいる。そこに、最後のご奉公となった＜侍従長用＞と記された、即位（大礼）の式次第がのこっている。「私が小さいころだったので、あまりおじいさんの記憶はありません。しかし、この式次第は、おじいさんが大礼のとき、肌身はなさずもっていたときいて、大事にしています」と、昌哉は話している。

珍田の葬儀は、青山斎場でおこなわれたが、東京の英字紙（新聞）アドバタイザーは、珍田を「偉大な重臣」とよぶ社説をかかげて、その死をいたみ、天皇も頼りにした老臣の死をいたまれて深く悲しまれたといわれる。

参考文献　菊地武徳『伯爵珍田捨巳伝』一九三八年（昭和十三）共盟閣

出典：弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、九五‐一〇四頁